

めざす児童生徒像

- ・互いを認め、尊重し合い、互いに高め合う生徒
- ・意欲を持ち、主体的・協同的に活動する生徒
- ・互いの考えを、正しく伝えあい、聴き合える生徒
- ・集団の規律やマナーを守り、場に応じた行動ができる生徒
- ・健康や体力増進に努め、心身ともに健やかな生徒

※児童生徒結果-教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果(%)			※差	達成状況の分析	改善策
				教員	児童生徒	保護者			
学校重点項目		①②の教員アンケート結果が80%以上になる。	① キャリア学習として、自己理解の時間、将来の夢や目標など未来を考える学習を推進している。	100				①～③の項目において、校長ビジョンに基づき、各担当からの提案を全教員で意識し取り組むことができています。  特に①②について、講師を招いての生徒の自己理解を進める取組、またkokuhuトーク等、生徒が主体的に対話する取組を積極的に推進することができた。	①～③肯定的回答には「どちらかといえばしている」という回答も含まれる。より積極的に取り組みが進むよう、共通認識を深め実践につなげる。  どの項目にも共通する「生徒が主体的に活動する場面」を様々な教育課程で取り入れる。
			② 学級会、kokuhuトーク、国府の集いの定例化など、主体的・対話的な活動の充実を図っている。	100					
			③ 授業を含め様々な教育活動の中で、生徒指導の3機能を生かした取り組みを実践している。	100					
			集計						
重点項目	働き方や業務の改善		① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	100				①については、職員室内の時間外勤務の削減の意識は高く、良い風土ができています。ただし80時間越えの職員は未だゼロではない。  ②について、学校規模が小さく、必然的に一人当たりの校務分掌が多くなっているが職員間に協力的な関係ができており、負担感が少ない。	①②引き続き、業務、行事内容の精選を進める。負担感の多い校務には複数配置するなど、業務の平準化を図る。また年間の授業時数を確認しつつ、学期末短縮等、繁忙期に職員が授業以外の業務を進める時間を確保する。
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができています。	94					
			集計						

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果(%)			※差	達成状況の分析	改善策	
				教員	児童生徒	保護者				
小松市共通重点項目	学校研究		① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	100				①②の項目において、校長ビジョンに基づき、研究部またGIGA推進担当からの提案を全教員が前向きに捉え、取り組むことができています。 また学校規模の小ささを活かし、全員参加型でSWOT分析を行い今年度の研究主題を決めていることも効果を上げている要因である。	研究主題を自分事として捉え実践につなげられるように、全員参加の分析等、継続してPDCAの持ち方を工夫する。  日常的な取組や生徒情報の交流などを大切に、組織全体で取り組む風土を育む。	
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100						
			集計							
	指導力の向上	「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善		① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	87	92		5	②について、昨年より話し合い活動を積極的に設ける取組を推進しており、効果をあげている。  ③について、生徒アンケートの結果が昨年よりも12%向上しており、話し合う場面の増加に伴い「自分の思いを伝える工夫」を意識していることがわかる。  ④⑤⑥では、教員よりも生徒の数値が多く表れている。生徒としてはできていないつもりだが、教員側の実感として、伝えるための根拠や話の組み立ての工夫、相手の考えを受け取めるといった点で、より改善が期待できると認識である。  ⑥GIGA強化月間としてICT活用を推進する期間を設け、全職員で取り組んだ。授業における学習用端末の活用場面は増加している。	①③④話し合いの場面では、生徒の主体性を活かしつつ、話し合いのルールや伝えるための工夫等、状況に応じたアドバイスやサポートを行う。  ②授業、行事、集会等において、話し合いの場をこれからも積極的に仕掛ける。  全体的に高い数値を示しており生徒は概ね意欲的に学習に取り組んでいるが、⑤の「振り返り活動」をより充実させ、生徒自身の実感として充実した学びとなるように取り組む。  ⑥学習用端末の日常的な利用は進んできている。学びが深まるように、より効果的な活用を図る。
				② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	100	91		-9		
				③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	87	91		4		
				④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達や自分の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	87	95		8		
				⑤ 児童生徒は、振り返り活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	87	88		1		
				⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	93	94		1		
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント		① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	100.0				①②③学校の教育目標の共通理解のもと、共通実践を行うことができています。年度末に全職員で分析・検証を行い、今年度の方針作りを行っている。このような研修会が必然的に共通理解のもと推進する土台となっている。  ④一学期には小学校の先生方に来校いただき新入生の授業参観と情報交換を、また小学校の公開授業を中学校教員が参観する等、小中連携を進めることができた。 ただし一部の教員の交流であり、全体での還流という点では今後の改善が必要である。	①②③親和的な職員室風土のもと、学校研究部より示された重点取り組みの実践を、全教科で意識して行うことができています。 校内研修会等の充実により全職員が納得の上で取り組めるようなPDCAを推進する。 夏季休業中の研修会で再確認し、二学期の取組の継続と、より効果的な指導につなげていく。  ④研修会等で得た情報を学年会や教科部会で共有し、個々の実践につなげる。
				② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	94.0					
				③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	94.0					
				④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	69.0					
集計										
家庭学習			① 家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	100	71		-29	①②昨年の反省から、課題の設定や学習用端末の活用の仕方を検討し、学年や教科の実情に合わせ、家庭学習での活用を推進している。わずかながら改善が見られる。 ①生徒 R4(61%) →R5(71%) ②生徒 R4(22%) →R5(54%)	学年や教科の実情に合わせた課題の工夫を継続して行う。また課題が過度な負担とならないように、個に応じた柔軟な対応を心掛ける。 キャリア教育を充実させ、学びが生徒自身の成長に必要なものであることの自覚を促し、意欲を喚起する。	
			② 学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	76	54		-22			
			集計							